

---

# 神が創りしもう一つの世界

ティーア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神が創りしもう一つの世界

### 【NZコード】

N8026N

### 【作者名】

ティーア

### 【あらすじ】

神の怒りに触れた二人の天使。

彼らが戻ってきた時の失敗から、少しづつ狂い始める。

フィクションです！実在の宗教、及び歴史とは何の関係もありません！

## 大喧嘩の末に（前書き）

一部宗教に喧嘩を売るよつた展開になるかと思います。

それでも大丈夫という人だけ進んで下さい。

## 大喧嘩の末に

「プロローグ」

「あーあ・・・。またか」

世界の端が消し飛んだのを感じた彼は、椅子の肘置きに頬杖を突く。「何でこんなに仲が悪いんだかね。いや、逆に仲がいいのかもしないけど大迷惑だつて。自分達で直せよ、全く」しばらくブツブツと文句を言い続ける。

「・・・何を言つてるんですか？」

その横で書物を読んでいた一人の青年が、呆れたような声で問いかける。

「ほつとけ。もう、放つて置いてくれ。自分が何を言おうと関係ない」

「主・・・大丈夫ですか？原因は大よそ予想がつきますが」「だつたら仲裁のついでに連れてきて。いい加減、頭にきた。何としてでも解決してやる」

青年は苦笑いしながら頷くと、一瞬でこの場から消え去つた。恐らく、消し飛んだ世界の端まで行つたのだろう。

「さて、次は・・・」

目を閉じた彼はふふつ、と笑つてから目を開ける。すると彼の目の前に、先程までいた青年と他二人が立つていた。

「俺は悪くありません！全て隣の奴が悪いんです！」

「先に手を出してきたのはお前だ！・・・何でまたこんな場所に来なければいけないのかつ」

剣を帯びた方が我先にと訴え始めると、隣で腕を組んで立つている方が悪態をつき始める。さつきまで静かだつたこの場が、急にうるさくなつた。

「はいはい。で、ガブリエル。結果は？」

「はい。いつもの通りです」

聞かなくとも全てを知っているのだが、一人の訴えを受け流すためにそう聞いたのだった。

「だよねえ」

頬杖を突くのをやめる。

「それで、二人は気が済んだのか?」

酷く冷たい声で、彼が言つ。その途端、言い争っていた二人もその威に負けて黙り込んだ。

「私はいい加減、お前達の争いに飽きた。何故和解しようとしないのか」

一度言葉を切ると、彼は右手を前へ差し出す。そして、そのまま振り下ろした。

「時が満ちるまで、向こうで頭を冷やせ。わかつたな?」

「そんな・・・ちょっと」

ただの光の玉と化した二人が、揃つてどこかへ飛んでいく。

「・・・いいんですか?」

「もちろん。向こうにはヨエルもいるしね」

どうなるかな。と呟く彼は、久し振りに感じた“わからない”に口の端を歪ませた。

## 戻されて失敗

### 一章

「あーあ、やつと終わつた！帰つたら寝よーっと」

大きく伸びをして、制服姿の少年が言つ。

周りの人が不審な目を向けてくるが、本人は全く氣にしていない。

「その前に宿題やれ。まだ明日もあるじゃねえか」

一緒に歩いている、同じ制服のもう一人が彼に現実を突き付ける。

「じゃあ、宿題やつてよ」

「それだと意味ないだろ？大体、宿題は自分でやるからこそ意味のある事だ」

「宿題なんてやつたつて無駄だし。僕、やんなくともいいし」

片方がむすてくれた。

どこからどう見ても友達にしか見えない一人。実は（年齢は同じだが）兄弟だつたりする。だが、全く似ていな。

一人は童顔。もう一人は大人っぽい顔立ちをしているため、実年齢は同じでも友達同士に見られがちである。

「開き直るな。お前はそれでいいかもしないが、こつちはいい迷惑だ」

言い忘れたが、開き直つた方が勇哉で、本当に迷惑そうにしている方は拓哉という。

いつもの様に学校から帰つている途中で、その先にある曲がり角を曲がれば二人の家に着く。二人のが通つてている中学校から割と近くにあるため、十分足らずで着く事が出来た。

曲がり角を曲がつた時、勇哉が立つていた人とぶつかつた。

「ひやあつ」

「おつと、悪い。大丈夫か？」

しりもちをついた勇哉に手が差し伸べられる。

「すみません」

「バー力。前見て歩け」

立ち上がりつた所を拓哉が軽く殴る。それに「ふえええ……」と変な声をもらした勇哉。そんな一人を見ていた彼は、何かに気付いたらしく探るような目を向けていた。

「そうか……。」ここで待つて正解だつたらしいな

そんな彼の呟きに、拓哉が反応する。

「おっさん、何言つてんだ？」

「いや、こつちの話だ」

不思議なその雰囲気に一人は飲まれて、彼に集中せざるをえなかつた。

「俺の主がお前らを呼んでたぞ？十四年も『苦労なこつたニヤニヤ笑いながら言つ彼に、拓哉が食つて掛かる。

「んだよ、おっさん。言いたい事があるならはつきり言え」

腕を組み、左に顔を傾けて睨み付ける拓哉。

「その癖も一緒か。ま、どうせ言つてもわかんねえつて。覚えてないんだから」

「うえつ？」

「どういう事だ？」

そんな二人の質問には答えず、彼は右手を一人の方へ差し出す。

「こんなんで思い出せばいいけどなあ……」

その手を振り下ろした時にはもう、一人はいなくなつていた。

「……あ、やべつ。失敗した」

「ふえつ？」

「・・・家の近所に森つてあつたか？」

気が付けば森の中。

「うにー・・・。ない」

そう言つて勇哉はキヨロキヨロ周りを見る。だが、今まで歩いてきた道はなく、ただ一抱えありそうな木があちこちに立つていてるだけ

だつた。

「だけど、これは間違いなく木だる」

「そだね」

二人はしばらく沈黙して、急に取り乱した。

「ど「お！？僕「ど「に来ちゃつたわけ？」

「意味わかんねえ・・・。もう全然意味わかんねえ・・・」

勇哉は頭を抱えて、拓哉は完全に呆然としていた。

あの変な人が原因だという事は、パニックを起こした一人でも理解できた。出来たが、どんな方法でここまで来てしまったのか、前後左右木に囲まれている一人には確かめようが無かつた。

「・・・とりあえず、状況を整理しよう」

まだ呆然としている拓哉だが、それだけは言えた。

「あのおっさんの所為だろ？んで、意味不明な理由だつたろ？気が付いたら森だろ・・・つて、意味ねえーー！」

どうしようもなかつた。

「拓哉拓哉、ちよつと聞いて。さつきのおじさんの顔、知ってる気がする。拓哉は？」

癖のない黒髪をぐしゃぐしゃにしながら頭の整理をしていた拓哉が、驚いた顔で勇哉を見る。

「・・・やつぱり、そななのか？何かそんな感じはしたんだけどな、確信が持てねえんだよ。何ていうか、会い過ぎてた奴に、久し振りに会つた感覚か？」

「僕に聞かないでえ・・・」

勇哉の情けない声を無視して、拓哉はさつきとは打つて変わつて冷静に辺りを見渡した。少し話したら、落ち着いたようだ。

「つたく。ここはどこなんだ」

風一つ吹かない静かな森に、生き物の気配はあまりないようになれる。

迂闊に動くことも出来ず一人が途方に暮れていると、後ろからガサガサと大きな音が聞こえてきた。その音に驚いた勇哉達は、一気に

振り返つて更に驚く事となつた。

「なんだ。びっくりした。ドラゴンか」

「あ、ああ。・・・って、ちょっと待て」

我に返つた拓哉が、じりじりと後退り始める。目の前にいるワードきから逃げる為に。

「俺の知識に間違いが無ければ、こいつは存在しないはずじゃないのか？」

「えと、言われてみればそうだね」

勇哉も拓哉に倣う。さすがに危険だと思つたらしい。

「ここがどこだか、大体の見当はついた。信じたくはねえが、世界丸ごと違うんじゃねえかって」

二人は顔を見合わせると、せーので逃げようとした。が。

「待て！」

鋭い静止の声がして、思わず立ち止まつてしまつた。

「リオラが言つた事は本当だつたのか。どうやってこの森に入った？答える！」

茶色のドラゴンの影から、飛行ゴーグルを付けた少年らしき人物が現れた。

彼はゴーグルを外すと、銀色の目で勇哉達を睨む。

「ここはエティルス神聖国の立ち入り禁止区域。お前達が入つてい場所じゃない」

自分達と同じぐらいの年齢の少年に言われたのが瘤に障つたのか、拓哉がムツとした顔になる。

「知らねーし、んなふざけた話。大体、お前誰だ？」

「僕はシグルス。エティルス飛竜団、ガナム支部、第八番隊のリーダーだ」

堂々と答えた少年だが、拓哉を納得させるのには程遠かつた。

「はあ？なんだその、なんたら飛竜団。そこまでファンタジーなのか？」

ファンタジーなのには、違ひないが。

初めての反応だったのか、シグルスは拓哉と勇哉を交互に見る。  
「・・・とにかく、お前達の身柄を支部に送検させてもらひつ」

そう言ってドラゴンを振り返る。

「リオラ、運べるな？」

その問い合わせに、リオラと呼ばれたドラゴンは大きく頷いた。

場所は変わつて、エティルス飛竜団ガナム支部。その建物にある小さな部屋に、勇哉達はバラバラに入れられていた。

「ふええええ・・・」

ふとした拍子にそんな声が漏れてしまい、勇哉は慌てて口を塞いだ。幸いな事に、部屋から出られないこと以外は何の制限もなかつた。拓哉大丈夫かな・・・。

そんな風に思つた矢先に拓哉の怒鳴り声が聞こえてきて、勇哉は苦笑した。

（何やつてんの？拓哉）

まるで遠くに呼びかけるように心中で呟くと、驚くべき事に返事が返ってきた。

（誰も来ねえんだよ。さつきからずっと人を呼んでるんだがな。・・・そつちは？）

拓哉の声に勇哉が答える。

（誰も来てないよ）

（チッ。一体何なんだ、こんなとこに入れて）

そんな風な会話をしていると、ガチャッとドアが開いた。

「支部長。」こちらです」

聞き覚えのある声がしたと思つたら、シグルスだ。奥にいた人を先に、自分は後から入る。

シグルスから支部長と呼ばれた人物は、勇哉の前に立つと微笑んだ。

「うえ？」

素つ頼狂な声を上げる勇哉に、シグルスはむつとした顔をする。

「そつ警戒しなくていい。俺は興味本位で来ただけだから」  
支部長はそう言つと、シグルスを振り返る。それにシグルスは肩を竦めて答えただけだつた。

「何ですか・・・？」

「あー、いや。君の顔をどつかで見た気がするんだけど・・・人違いか？」

「さ、さあ？」

苦笑いしながら首を傾げた勇哉。

「確かに僕の知り合い、というかアレを子供にしたらこんな感じにはなるとは思いますけど」

ドアに寄りかかつて腕を組んでいるシグルスが呆れたように言つ。  
「あの大喧嘩の後、二人共いなくなつてるからつて勝手に決め付けるな？」

「はい、そうです。主から何か告げられている奴は、ビュレス持ちでもいなかつた」

しばらく支部長とシグルスをを食い入るよつて見詰めていた勇哉だが、顎に手をやると考え始めた。

「ビュレスつて、『祝福を受けた力を賜う』的な意味？」

そんな咳きを洩らした勇哉に、支部長が訝しげな顔をする。まさか自分から話しかけるなんて、思つっていたのだろう。

「原義では、そうだが」

「何で知つてるんだろう？何かわかります？」

「さすがに、それはわからんな」

支部長が唸りながら顎を扱ぐ。

「ところで、君の名前は？」

その問いに勇哉ははつとする。

「勇哉です。ただの勇哉」

慌てて答えた勇哉を見て、支部長は苦笑いする。

「あつちの友達は？」

「拓哉です。・・・あの、拓哉は一応戸籍上では双子の兄なんです

けど

しゅんとなつた勇哉の前では、一人が啞然とした顔になつていた。

沈黙。

「や、これはちょっと、理解するのに時間が・・・」

拳動がおかしくなり始めている一人に、勇哉は首を傾げる。

「何だつて？僕と弟ですら似ている所はあつたのに」

「うえ？シグ尔斯さんにも弟いるの？」

勇哉の質問には答えない。いや、答えられるだけの余裕がない。

「なあ、シグ尔斯。ちょっと聞いてきてもらえるかな？これは益々怪しくなってきた」

「は、はい。やるだけやつてみます」

急いで部屋を出て行つたシグ尔斯。それを見送つた支部長はため息をつくと、言つた。

「嫌な予感がするな・・・」

その呴きが耳に入つてきたのか、勇哉は口をぐの字に曲げた。

## 戻されて失敗（後書き）

いつ終わるのかわかりません。

三週間程間を開けて投稿すると思います。

・・・日本だから、大丈夫ですよね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8026z/>

---

神が創りしもう一つの世界

2011年12月25日19時54分発行